

## 一椀の大根おろし

初夏の宵なり

病み疲れた寝臺に起出でて

ほろ苦き一椀の大根おろしを喰らふ

肌あらき病衣に瘦軀を包み

ぼつたりと重き繻帯フオーケに肉又を差込み

わたしはがつがつと大根おろしの一椀を喰らふ

思へば病みてより早や幾とせ

げにこれまで生きながらへて来たるものかな

一驚を喫す 一驚を喫す

見よ、己が姿かけを

而して思ひをなせ

日夜 病菌の裡に住へど

かくいのちの在るは嬉しからずや

貧しき一椀の大根おろしを愛するは幸ひならずや

われとて何時の日か

父の御許に帰り行くらん

なべてはそれまでの愛の十字架

ああ忘れ得ぬ人の世の一事ならずや

さらば 喰らはん 餓鬼の如くに喰らはん

大根おろし 大根おろし

涎と汁とそして涙と

ああ初夏の宵の一椀の大根おろし……

(昭和十四年「山桜」九月号)